松波むかし語り ―ここに住み続けて その10

今回のお客様

洋品店「チロル」を経営する

林　隆男さん 72歳 3・4丁目

“お年寄りが好きな赤にもいろいろあって、その人に似合う赤があるものですよ！”

身につける物から街の移り変わりを見てこられた林さん。「鳩山さんはいいネクタイをしてる」なんて目の付け所が違います。

松波郵便局のはす向かいに洋品店「チロル」を営む林さんは、静岡県は島田のご出身、高校を出て日本橋馬喰町の装粧品問屋に就職し、主に仕入部門を担当していたそうです。昭和30年代のはじめで、セルロイドがプラスチックに、ストッキングが綿や絹からナイロンに、やがてそれがシームレスに代わっていくなど、新しい素材が出回り商品が大きく変わった時代ですね」。なつかしいですね、どんどん商品の素材が新しくなり、売れ行きも延びた高度成長のはじまりの頃ですね。

昭和39年開店のチロル

で、なぜ松波へ？　「ゆくゆくは独立したいと思っていたところ、同僚の紹介で昭和39年、３丁目（当時は１丁目）の長寿庵さんの向かいに店を持ったんです。初めて西千葉駅を降りて、バス通りの坂道の上から千葉商の交差点方面を見るとにぎやかだったですね。北島ふとん屋さんのはす向かいが松波ストア、そしてダイソーベーカリーさんと、商店が軒を連ねていました」。オリンピックの年ですね。当時は本当ににぎやかでしたが、今はチロルさんが町内唯一の洋品店なんですって？　「そうなんです、私が店を開いた時分、たしか松波には他に３、４軒の洋品店がありました」。

ところで“チロル”という名前はどうして？　「馬喰町時代、セルロイドの仕入れをしていた時、針箱の絵が御所車ばかりでさえないと思って、当時人気のあった中原淳一風の絵に替え“メルヘン”と名前を付けたところ、とても喜ばれたんです。時代がロマンチックなものを求めていたんですね。それで、店の方も当時好きだった山歩きのつながりで、チロルと名づけました」。

そうなんですか、「チロル」はいわば“街の洋品店”ですね。商売では、どんなことに気を使っておられますか？　「昔は子どもさんが多い街でしたから、子供用品がよく売れました。いまは高齢化も進んでいますし、例えば、サイズが少し合わない洋服を買っていただいたら、体型に合わせて詰めてさしあげるとか。また、入院するのに前開きの下着が欲しいと思っても、スーパーには売ってない。そこで、そんな商品も切らさず在庫しておくとか……。馬喰町にいましたから、どこの問屋に何があるかわかっているのが私の強みです。その知識を活かして、“地域の人に便利なお店”を目指しています」。

現在のチロル洋品店

宇井会長時代の町会では、防犯防災部で活躍、いまも防犯パトロールに林さんの姿があります。“安いものならスーパーにある。人は自分だけの個性を求めて小売店にやってくる”というのが林さんの信条と見ました。「趣味は日曜大工と畑仕事かなあ」。“釣りは大井川で鍛えたウデ”とか、恐れ入りました。